

教科書購買と単位取得数との関係

水戸 康夫¹⁾, 八島 雄士¹⁾, 進本 眞文²⁾, 権 純珍³⁾

Purchase of Textbook and the Number of Credit Earning

Yasuo MITO¹⁾, Yuji YASHIMA¹⁾, Masafumi SHIMMOTO²⁾,
Soonjin KWON³⁾

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the correlation among the number of credit earning, attendance, and purchase of textbook. We set up the hypothesis that attendance for lectures or purchase of textbook reflect time discount rate and tested whether there is correlation between those factors and the number of students' credit earning, or not. As the result of our test, there were no significant differences about attendance for lectures or purchase of textbook between subjects, whose credit earning is above the average, those, whose it is below the average. Moreover, we found that the marking standards of some lectures are not adequate by a careful examination of experience.

KEY WORDS : attendance, purchase of textbook, the number of credit earning, marking standards

1) 九州共立大学経済学部

2) 九州共立大学 総合研究所

3) 元九州共立大学経済学部 教員

1) Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Economics

2) Kyushu Kyoritsu University, Research Center

3) Kyushu Kyoritsu University, Faculty of
Economics, Former Professor

第1章 はじめに

九州共立大学経済学部ゲーム理論研究会では、時間割引率の程度と相関のある要因を探究する実験を行ってきた。水戸・進本・八島・権（2013）では、せっかちさの程度を時間割引率の程度と相関のある要因とみなして、単位取得確率と対応させた自習時期の選択に関する実験を行なった。水戸・進本・八島・権（2014）では、喫煙習慣とインターネット等への長時間接触を時間割引率の程度と相関のある要因とみなして、喫煙習慣者であるか否か、および長時間接触者であるか否かと、取得単位数との間における相関に関する実験を行なった。

喫煙習慣者は非喫煙習慣者よりも取得単位数が少ないことから、喫煙習慣と取得単位数には相関のあることを明らかにできたが、せっかちさの程度と長時間接触者であるか否かの要因はほとんど相関はなかった。実験協力者である大学生における喫煙習慣者が少ない現状では、喫煙習慣以外の要因によって、時間割引率の程度を簡易に弁別することは重要である。時間割引率の程度を簡易に弁別することのできる要因を特定化できれば、時間割引率の程度と関係があると考えられている依存症や多重債務等、社会にとって重要な問題を考察することが容易となり、考察するための足がかりとなり得る。このため九州共立大学経済学部ゲーム理論研究会では、時間割引率の程度と相関のある要因の探究を続けてきており、本年度においても、時間割引率の程度と相関のある要因の探究を続けている。

本論における実験は、出席や遅刻の程度および教科書購入の程度が、時間割引率を反映する要因であると見なし、それら要因と取得単位数とに相関があるのか否かに関する実験を行なった。あらかじめ実験結果を述べておくと、取得単位数が平均以上である実験協力者と平均未満の実験協力者における、出席や遅刻の程度および教科書購入の程度は、相違していなかった。この実験結果は予想外であった。取得単位数が平均以上である実験協力者であれば、平均未満の実験協力者よりも、出席は良好であり、遅刻している可能性は低く、教科書購入しているという結果となることを予想していた。しかし、そうならないのであれば、教科の採点基準が妥当でないか、あるいは出席が良好でない、遅刻可能性が高い、および教科書を十分には購入していないという学生の認識が妥当でない可能性がある。あるいは、平均的な取得単位数に関する学生の認識が妥当でない可能性もある。分別の基準が妥当ではない

ことも考えられる。例えば、15回のうち0回～2回欠席者と3～5回欠席者との分別や、遅刻する可能性のあるのは月3回以上と月3回未満である実験協力者との分別では、取得単位数には相違が出ない等の理由が考えられ、この理由の探究は重要である。

第2章では実験を紹介し、第3章では、教科書購入する理由、購入しない理由に注目しての分析を行ない、第4章ではまとめを行なう。

第2章 実験

実験1は、平成27年1月27日の九州共立大学経済学部における「原価計算論」受講生に対して行なった¹⁾。授業終了後、回答してくれた学生には、ボーナス点を与えることを伝え、配付する用紙（資料1）に答えてくれるよう、協力を要請した。「原価計算論」を受講していた学生は、九州共立大学経済学部経済・経営学科の2年生～4年生である。

資料1では4つのことを聞いている。問1は実験協力者が遅刻せずに授業に参加しているかどうかを知るために、朝起きたい時間に起きることができるといふかを聞いた。この質問は、講義に遅れないことを重視するか、もう少し長く眠り続けることを重視するかを明らかにしようとする質問である。「あなたは朝、7時なら7時、8時なら8時に起きようと思ったら、起きることが出来ますか」という質問を行なった。起きられないことは月に0回、月に1～2回起きることができない、起きられないことが月に3回以上に分けて、月に3回以上の学生を「睡眠重視者」と呼び、講義を遅刻せずに出席することによって、単位の取得確率を高めることよりも、現時点において、もう少し長く眠り続けることを重視していると見ることで、時間割引率の高低を推測できると考えた。

問2は取得単位の状況について自己評価してもらうために、「あなたの取得単位は、あなたの考える平均的な取得単位の学生と比べて、多いと考えるか、少ないと考えるか」という質問を行ない、平均以上と認識する実験協力者と平均未満と認識する実験協力者を分別しようとした。

問3は実験協力者の欠席状況を聞いた。質問は「15回の授業のうち欠席したのは、病気の時を含めて0～2回まででしょうか。それとも3回以上欠席した科目が半数以上ありますか」というものである。5回までは欠席可能であるので、体調が少しでも悪い場合には欠席を選択する実験協力者を「出席軽視者」と呼び、

可能な限り出席することで単位の取得確率を高めることよりも、現時点での体調を重視していると見ることで、「出席軽視者」の時間割引率の高低を推測できると考えた。

問4は、教科書の購買程度に関する質問である。質問は「教科書を買った科目が半数以上でしょうか。それとも買った科目は半数未満でしょうか」というものである。教科書を購買する科目が半数未満の実験協力者を「非購買者」と呼び、「非購買者」は、教科書を購買しないことを選択した時点で得られる効用（教科書のために支出する代金の節約で得られる効用）と、単位の取得確率が低下する可能性よりもたらされる試験終了後の不効用とを比較して、購買しないことを選択していると考えることができる。上述のように考えることで、「非購買者」の時間割引率の高低を推測できると考えた。

実験1において、資料1を74枚配った。回答用紙の中に、実験設定を誤理解したことによって、選択に影響のあった回答は存在しなかった。理由に関する記述が回答用紙の半分以下であったり、回答されていない質問項目があるために無効とした回答が合計25枚ある。無効とした回答は25枚なので、有効回答は49枚である。

実験2は、平成25年2月3日のA大学における科目「B」受講生に対して行なった。実験1では男女学生が混在しているが、実験2では女子学生のみが実験協力者である。授業終了後、回答してくれた学生には、ボーナス点を与えることを伝え、配付する用紙（資料1）に答えてくれるよう、協力を要請した。科目「B」の受講生は、2年である。

実験2において、資料1を37枚配った。回答用紙の中に、実験設定を誤理解したことによって、選択に影響のあった回答は存在しなかった。理由に関する記述が回答用紙の半分以下であったために無効とした回答は15枚であった。無効とした回答は15枚なので、有効回答は22枚である。

実験1と実験2における予想

「睡眠重視者」や、「出席軽視者」や、「非購買者」の取得単位数は、平均的な取得単位数よりも低いことを予想する。つまり、平均的な取得単位数よりも高いと認識する実験協力者における「睡眠重視者」比率や「出席軽視者」比率や「非購買者」の比率は、平均的な取得単位数よりも低いと認識する実験協力者における「睡眠重視者」の比率や「出席軽視者」比率や「非

購買者」の比率とは相違すると予想する。

欠席していたり、遅刻した時に講義された内容がテストに出題される可能性が存在し、たとえ、遅刻したり欠席していた時の授業内容が後から確認できるとしても²⁾、内容の理解は出席していた学生よりも低いことが予想される。このため、出席が良好でなく、遅刻することの多い実験協力者の取得単位数は、遅刻することがなく、出席の良好な実験協力者よりは、少ないと考えることができる。

「非購買者」は、教科書を購買して講義に臨んでいる実験協力者よりも、講義の内容理解は劣ると考えることができる³⁾。講義の内容を十分に理解するために必要であるから、教科書の指定がされているはずだからである。上述の理由によって、「非購買者」は、教科書を購買する科目が半数以上の実験協力者よりも取得単位数は少ないと考えることができる。

実験1の結果

表1によれば、平均以上の取得単位数の実験協力者であると回答した回答用紙は36枚であり、平均未満の取得単位数の実験協力者であると回答した回答用紙は13枚なので、平均以上の取得単位数の実験協力者である比率は73.5%（=36/49）である。

平均以上の取得単位数の実験協力者であると回答した回答用紙のうち、「睡眠重視者」は7枚（19.4% = 7/36）、「出席軽視者」は14枚（38.9% = 14/36）、「非購買者」は17枚（47.2% = 17/36）あった。「睡眠重視者」のシェアが最も低く、「出席軽視者」のシェアは中位であり、「非購買者」のシェアが最も高い。

平均未満の取得単位数の実験協力者であると回答した回答用紙は13枚であり、そのうち、「睡眠重視者」は3枚（23.1% = 3/13）、「出席軽視者」は12枚（92.3% = 12/13）、「非購買者」は9枚（69.2% = 9/13）あった。「睡眠重視者」のシェアが最も低いということは、平均以上の取得単位数の実験協力者の場合と同様である。「非購買者」は中位のシェアではあるが、平均以上の取得単位数の実験協力者の場合よりも高いシェアである。「出席軽視者」のシェアは最も高く、この高さは予想外であった。

実験前の予想は、平均以上の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」、「出席軽視者」、「非購買者」のシェアは、平均未満の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」、「出席軽視者」、「非購買者」のシェアよりも低いというものであり、表1によれば実験前の予想通りの結果が得られたとい

える。実験前の予想通りの結果が得られたとはいえ、データ数が少ないため、統計学に基づく検討が必要であるため、以下では独立性の検定を行なう。

平均以上の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」の比率と、平均未満の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」の比率が同じであるという帰無仮説について検討する⁴⁾。

Pearsonの χ^2 乗値(統計検定量)は1.111であり(自由度2), 有意水準0.05の統計検定量の棄却値は3.841なので, 帰無仮説は棄却できない。帰無仮説を棄却できないので, 平均以上の取得単位数と認識する実験協力者であるのか平均未満の取得単位数と認識する実験協力者であるのかは,「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」の比率に影響を及ぼしたとは言えない。

表1 睡眠重視者と出席軽視者と非購買者である実験協力者の取得単位数の認識

	睡眠重視者	出席軽視者	非購買者
平均以上の取得単位数:36枚	7枚(19.4%)	14枚(38.9%)	17枚(47.2%)
平均未満の取得単位数:13枚	3枚(23.1%)	12枚(92.3%)	9枚(69.2%)

出所)筆者作成。

注) 1) 実験協力者には, 男子学生と女子学生が混在している。
2) 取得単位数の平均は, 各実験協力者の認識する平均である。

実験2の結果

表2によれば, 平均以上の取得単位数であると回答した回答用紙は16枚であり, 平均未満の取得単位数の実験協力者であると回答した回答用紙は6枚なので, 平均以上の取得単位数の実験協力者である比率は72.7% (=16/22) である。

平均以上の取得単位数の実験協力者であると回答した回答用紙は16枚であり, そのうち,「睡眠重視者」は4枚 (25.0% = 4/16),「出席軽視者」は3枚 (18.8% = 3/16),「非購買者」は6枚 (37.5% = 6/16)あった。「出席軽視者」のシェアが最も低く,「睡眠重視者」のシェアは中位であり,「非購買者」のシェアが最も高い。「非購買者」のシェアが最も高いという結果は, 実験1における結果と同じである。「非購買者」以外の「出席軽視者」と「睡眠重視者」については, 実験1における順位と実験2における順位は相違している。このような相違は, 対象とした数が少ないために生じた結果であるのか, 女子学生数の相違が影響した結果であるのか, 目的意識をどの程度持っているのかが影響した結果であるのか, 実験1と実験2だけでは何も述べることはできない。

平均未満の取得単位数であると回答した回答用紙は6枚であり, そのうち,「睡眠重視者」は1枚 (16.7% = 1/6),「出席軽視者」は3枚 (50.0% = 3/6),「非購買者」は3枚 (50.0% = 3/6) あった。「睡眠重視者」のシェアが最も低く,「出席軽視者」と「非購買者」のシェアは同じである。「睡眠重視者」のシェアが最も低いという結果は, 表1における平均未満の取得単位数と同じである。実験2における「出席軽視者」のシェアは50.0%であるが, 実験1での「出席軽視者」のシェアは92.3%であり, 相違している。この結果の相違も, 対象とした数が少ないために生じた結果であるのか, 女子学生数の相違が影響した結果であるのか, 目的意識をどの程度持っているのかが影響した結果であるのか, 実験1と実験2だけでは何も述べることはできない。

実験前の予想は, 平均以上の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」のシェアは, 平均未満の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」のシェアよりも低いというものであり, 表2によれば実験前の予想通りの結果が得られたとはいえない。

実験前の予想通りの結果が得られなかったとはいえ, データ数が少ないため, 統計学に基づく検討が必要であるため, 以下では独立性の検定を行なう。

平均以上の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」の比率と、平均未満の取得単位数と認識する実験協力者における「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」の比率が同じであるという帰無仮説について検討する⁵⁾。

Pearsonの χ^2 乗値(統計検定量)は1.099であり(自由度2), 有意水準0.05の統計検定量の棄却値は3.841なので, 帰無仮説は棄却できない。帰無仮説を棄却できないので, 平均以上の取得単位数と認識する実験協力者であるのか平均未満の取得単位数と認識する実験協力者であるのかは,「睡眠重視者」,「出席軽視者」,「非購買者」の比率に影響を及ぼしたとは言えない。

表2 睡眠重視者と出席軽視者と非購買者である実験協力者の取得単位数の認識

	睡眠重視者	出席軽視者	非購買者
平均以上の取得単位数:16枚	4枚(25.0%)	3枚(18.8%)	6枚(37.5%)
平均未満の取得単位数:6枚	1枚(16.7%)	3枚(50.0%)	3枚(50.0%)

出所)筆者作成。

注) 1) 実験協力者は女子学生のみである。

2) 取得単位数の平均は, 各実験協力者の認識する平均である。

第3章 考察

第2章実験結果によれば、平均以上の取得単位数と認識する実験協力者であるのか平均未満の取得単位数と認識する実験協力者であるのかは、「睡眠重視者」、「出席軽視者」、「非購買者」の比率に影響を及ぼすとは言えない。これは、事前の予想とは相違する結果である。つまり、「睡眠重視者」「出席軽視者」や「非購買者」の取得単位数が、平均的な取得単位数よりも低いという結果とはならなかった。この理由を探究するために、回答用紙裏面に書かれた選択理由を見たが、この理由を明らかにするようなことは書かれていなかった。

更なる実験を行なうことによって、平均以上の取得単位数と認識する実験協力者であるのか平均未満の取得単位数と認識する実験協力者であるのかは、「睡眠重視者」、「出席軽視者」、「非購買者」の比率に影響を及ぼさない理由を明らかにすることは重要であり、今後の課題としたい。

本章では、実験1の実験協力者の選択と実験2の実験協力者の選択において、平均以上の取得単位数と認識する実験協力者である比率（平均以上の取得単位数と認識する実験協力者/全実験協力者）がほとんど同等であることについての考察を行ないたい。具体的には、実験2の実験協力者は実験1の実験協力者よりも、真摯に講義に取り組んでいるように見えるにも関わらず、実験1における実験協力者において平均以上の取得単位数と認識する実験協力者である比率（＝36/49）は73.5%であるのに対して、実験2における実験協力者において平均以上の取得単位数と認識する実験協力者である比率は72.7%（＝16/22）であり、ほとんど同じ比率である。この理由として、本論では教科の採点基準が妥当でない可能性についての検討を行なうこととする。

表3 実験1と実験2において、教科書を購買する理由と購買しない暫定的な理由

	「非購買者」	教科書購買者
実験1	必要性を感じない。【合計17枚】 講義で教科書を使用しない。【6枚】 プリントもらえるので、必要ない。【5枚】 必要なら購買する。 教科書無くても講義に参加できる。 購入しないといけない科目は少ない。 あってもなくてもどちらでもいい感じである。 教科書無くても、ノートある。 読まない可能性高いので、もったいない。 教科書の価格は高い。【5枚】	教科書はいつか役に立つ。 持ち込み可の場合が多い。【4枚】 分からないところは教科書を読んで勉強する。 教科書に沿った講義多い。 教科書は必要不可欠である。【2枚】 教科書購買は自己投資である。 教科書無いと単位取れない科目がある。

実験1	教科書を使わない科目選択している。【2枚】 テストで持ち込み可の時のみ購買する。【2枚】 先輩・友人からもらう。【2枚】 講義中に、友人に見せてもらう。 購買する方が良いが、なくてもいいといわれた。	
実験2	必要性を感じない。【合計9枚】 講義で教科書を使用しない。【2枚】 プリントもらえるので、必要ない。【7枚】 教科書を使わない科目選択している。【2枚】 友人で貸し借りする。 過去に購買した教科書を別の科目で使ったので、	英語は教科書を使うので。【2枚】 教科書は必需品だと考えている。【2枚】 教科書がないと講義についていけない。【2枚】 教科書に沿った講義多い。【5枚】 教科書購買し勉強することが学生の本分である。 教科書に、調べたことを書き込んだりできる。 教科書共有すると、テストの時に困る。

出所)筆者作成。

注) 1) 1枚の回答用紙から理由を複数抽出するケースと、理由を抽出できないケースが存在している。

2) 同様の理由はまとめている。

3) 理由を抽出する時に、複数によって確認していないことから、暫定的という言葉を使っている。

表3によれば、実験1においても、実験2においても、教科書非購買の理由として最も多いのは、「必要性を感じない」という理由である。例えば、教科書は使用しているが、プリントを併用していれば、講義において教科書を買わなくても何ら問題ないことが予想されるにも関わらず、教科書が指定されていることがある。プリントを併用しておらず、講義において教科書を買わないと、講義における理解が困難となる科目も存在しているのであろうが、プリントを併用している科目の存在が、実験協力者に教科書非購買を選択させていると考えられる。したがって、教科を担当されている先生は、プリントを併用している場合には、教科書としてではなく参考書として指定すべきであろう。

実験1と実験2における、教科非購買の理由として相違している点としては、「教科書の価格は高い」という理由である。実験1では5枚あったが、実験2では1枚もなかった。実験2においても、「友人で貸し借りする」や「教科書を使わない科目選択している」という理由が見られるので、実験2の実験協力者においても「教科書の価格は高い」と感じていると考えられる。それにも関わらず、「教科書の価格は高い」という理由は1枚もなかった。このことは、大学生である限り、教科書が高いことは教科非購買の理由とはならないと、実験2の実験協力者は考えていると見なせる。それに対して、実験1の実験協力者は、教科書が高いことは教科書非購買の理由になると考えていると見なせる。

実験1と実験2における、教科書購買者の購買理由において相違している点としては、実験1では「持ち

込み可の場合が多い」という理由が最も多い理由であるが、実験2では「持ち込み可の場合が多い」という理由は1枚もないことである。実験2における実験協力者の場合、テストの時に持ち込み可の教科があるのか、多いのか少ないのかは明らかではないが、実験2における実験協力者はテスト時に、持ち込み可であるか否かに関わりなく、教科書購買を選択しているように見える。

表1によれば、「非購買者」は53.1% ($= (17+9) / (36+13)$)、表2によれば、「非購買者」は40.9% ($= (6+3) / (16+6)$) なので、実験1における半数以上の教科での教科書購買する実験協力者のシェアは46.9%であるのに対して、実験2では59.1%である。つまり、テストの時に教科書持ち込み可という理由がなかった実験2における実験協力者の方が、教科書を購買する比率は高いので、実験2における実験協力者の方が、勉学への意欲、ひいては単位取得への意欲が高いと見ることは可能である。

表3における、実験1と実験2における相違はいくつかあったが、最も大きな相違は、勉学に対する姿勢や、単位取得への意欲の高さである。実験1における実験協力者の中にも、勉学に対して真摯な姿勢である者や、高い意識を持って勉学している者も存在しているが、表3を見る限り、実験2における実験協力者の方が勉学に対して真摯な姿勢を持つ者、高い意識を持っている者が多いと感じられる。実験2における教科書購買理由である「教科書を購買し勉強することが学生の本分である」という理由が象徴的であり、教科書価格の高いことが教科非購買の理由となるののかならないのか、教科書持ち込み可でないことが教科非購買の理由となるののかならないのかを見ると、実験1と実験2における実験協力者の勉学に対する姿勢、意識の高さの相違は大きいように見える。

実験1と実験2における実験協力者の勉学に対する姿勢、意識の高さは、表1における平均以上の取得単位数と認識する実験協力者と平均未満の取得単位数と認識する実験協力者の両者を合計した時の「出席軽視者」のシェアは53.1% ($= (14+12) / (36+13)$) と、表2のシェア27.3% ($= (3+3) / (16+6)$) を比較すれば、より明瞭となる。

遅刻の多さに関係する「睡眠重視者」のシェアは、表1における両者を合計した時のシェア20.4% ($= (7+3) / (36+13)$) と、表2のシェア22.7% ($= (4+1) / (16+6)$) は同じ程度であった。この結果から、実験2における実験協力者は、実験1における実験協力者

よりも欠席数は少ないが、遅刻は同程度であると考えられる。いいかえれば、勉学に対する姿勢が真摯である実験協力者が多く存在するか否かは、遅刻者の数に影響を与えることはないのかもしれない。

勉学に対する姿勢が真摯である実験協力者が多いのか少ないのかは、平均以上の取得単位数と認識する実験協力者と平均未満の取得単位数と認識する実験協力者の比率に影響を与えなかった。実験1において平均以上の取得単位数の実験協力者である比率が73.5%、実験2においては72.7%と近似していた。

出席が十分でないという意味で、勉学に対する姿勢が真摯でない学生の多く在籍する大学・学部における平均取得単位数は、ほとんど欠席しないという意味で勉学に対する姿勢が真摯である学生の多く在籍する大学・学部における平均取得単位数よりも低いことが予想される。

表1における両者を合計した時の「出席軽視者」のシェアは、実験を行なった九州共立大学経済学部においては53.1%であり、実験を行なったA大学においては27.3%である。この結果は、実験を行なった教科における結果であり、九州共立大学経済学部全体やA大学全体についての出席状況について、断定的に述べることはできない。また、実験協力者の認識に基づく回答結果であり、客観的な事実ではない。上述のことに留意しつつ、考察を行なう。

「出席軽視者」の一定割合が単位取得に失敗することを予想することができ、この一定割合がどのような大学・学部であっても共通であるとすれば⁶⁾、「出席軽視者」のシェアの高い九州共立大学経済学部では、取得単位数の少ない実験協力者の数は多いかもしれない。実験協力者以外の学生も、実験協力者と同様な行動をとると仮定すれば、九州共立大学経済学部の学生には、取得単位数の少ない学生がA大学の学生よりも多いことになる。その結果として、卒業できずに留年する学生の数は、A大学よりも多いことが予想できる。

もし、九州共立大学経済学部において卒業できずに留年する学生の比率が、A大学と同等であるならば、九州共立大学経済学部の学生がテストにおいて点数を獲得する能力がA大学学生よりも高いか、追再試などによって取得単位数が少なくなることを防止しているのか、採点基準を他の大学よりも緩やかにすることを通じて、十分に出席しない学生であっても、A大学と同等の単位数を取得しているのかもしれない。データがないために、これ以上の分析は行なえないが、もし、採点基準を他の大学よりも緩やかにしているとすれば

問題である⁷⁾。

第4章 まとめ

平均以上の取得単位数と認識する実験協力者であるのか平均未満の取得単位数と認識する実験協力者であるのかは、「睡眠重視者」、「出席軽視者」、「非購買者」の比率に影響を及ぼしたとは言えず、事前の予想とは相違する結果となった。つまり、遅刻しがちな実験協力者や、出席が良好でない実験協力者や、教科書を購買しないことの多い実験協力者の単位取得数が、平均的な単位取得数よりも低いという結果とはならなかった。この理由については、実験1と実験2では探究できなかった。

理由については分析できなかったが、実験1と実験2の結果から、九州共立大学経済学部の実験協力者とA大学の実験協力者における勉学に対する姿勢の相違が大きいように見えることを明らかにした。勉学に対する姿勢の相違が大きいにも関わらず、卒業できずに留年する比率がそれほど相違していないとすれば、九州共立大学経済学部における採点基準がA大学よりも緩いのかかもしれない。データがないために、これ以上のことを述べることはできないが、九州共立大学経済学部における採点基準⁸⁾がA大学よりも緩いとすれば問題である。

いくつかのことを明らかにできたが、時間割引率の程度と相関のある要因を探究することには成功しなかった。今後、時間割引率の程度と相関のある要因を探究していきたい。

資料1

レポート

平成27年 月 日

このレポートは集計データとして、論文に使用する予定であり、個人データとしては利用しません。また、プライバシーは保護します。このレポートの論文利用を承諾する場合は、問1～問4の問題を回答し、選択理由を裏面に半分以上書いて提出してください。論文データとして利用することを受諾しない場合は、提出する必要はありません（学籍番号と名前を書いて提出することはできます）。提出しないことによって、不利益な扱いはしません。

問1～問4に回答して裏面に半分以上書いた場合、テストの点数にボーナス点（5点予定）を加える予定です。ただし、用紙の半分以下しか記述されていない

場合には、ボーナス点は1点とします。また、学籍番号と名前のみ書いて提出する場合も、テストの点数にボーナス点（1点予定）を加える予定です。

学部学科 学年 学籍番号 名前

【問1】 あなたは朝、7時なら7時、8時なら8時に起きようと思ったら、起きることができますか（起きられないことは月に0回：「0回」）、ほぼ起きることができますか（起きられないことは月に1～2回：「1～2回」）、起きられないこともありますか（月に3回以上起きられない：「3回以上」）。

あなたの現時点での回答

[0回, 1～2回, 3回以上]

【問2】 あなたの取得単位は、あなたの考える平均的な取得単位の学生と比べて、多いと考えますか（「平均以上」）、少ないと考えますか（「平均未満」）。

あなたの現時点での回答

[平均以上, 平均未満]

平均程度と考える学生は「平均以上」の方に○をしてください。

【問3】 これまでに受講した科目のうち、半数以上の科目で、15回の授業のうち欠席したのは、病気の時を含めて0～2回まででしょうか（「2回以下」）。それとも3回以上欠席した科目が半数以上ありますか（「3回以上」）。

あなたの現時点での回答

[2回以下, 3回以上]

【問4】 これまでに受講した科目のうち、指定された教科書のある科目において、教科書を買った科目が半数以上でしょうか（「半数以上」）。それとも買った科目は半数未満でしょうか（「半数未満」）。

[半数以上, 半数未満]

半数程度と考える学生は「半数以上」の方に○をしてください。

注)

1 平成27年1月27日の九州共立大学経済学部経済・経営学科における「管理会計論」受講生に対しても、実験を行なった。しかし、「原価計算論」と「管理会計論」を重複して受講している学生が少なからず存在していたことと、「管理会計論」受講生の方が少ないことと

から、本論では「原価計算論」受講生に行なった実験結果のみを紹介する。「管理会計論」受講生に行なった実験結果の詳細は紹介しないが、「原価計算論」受講生に行なった実験結果とほぼ同じものであった。

2 九州共立大学にはシラバスオンラインがあり、シラバスオンラインを見ることによって、欠席した時の授業内容を理解することが可能となっている。九州共立大学やA大学の先生の中には、ホームページにパワーポイントの形で授業内容を保存していたり、講義で配布したプリントを、後でも入手できるようにしている先生の存在していることが予想される。

3 試験時に教科書のみ持ち込み可とする科目が存在している時に、教科書を購買していないとすれば、単位取得への意欲の低さが、教科書を購買しないという行動に反映しているのかもしれない。したがって、教科書持ち込み科目が混在している状況で、教科書を購買しないということは内容理解の低さだけではなく、意欲の低さからも、取得単位数は低いことが予想される。

4 統計ソフトとしてはドクター SPSS2を使用している。Nは20以上ある方が望ましく、期待度数が5未満のセルの場合、SPSSはイエーツの補正を行なっている。

5 統計ソフトとしてはドクター SPSS2を使用している。Nは20以上ある方が望ましく、期待度数が5未満のセルの場合、SPSSはイエーツの補正を行なっている。表2では期待度数が5未満のセルが多く存在しており、結果の分析には、十分な注意が必要である。

6 現実には、大学、学部によって、また、時期によって相違すると思われる。しかし、データを集めることは困難であるため、第1次接近として、「出席軽視者」の一定割合が単位取得に失敗するとして、「出席軽視者」の一定割合は各大学・学部で共通と仮定する。

7 ある大学では、非常勤の先生を会場に集めた上で、非常勤の先生に対して学長が、できるだけ単位を与えるようにという要望を行なっているという話を聞いたことがある。

8 テストにおける点数に出席状況を加味した点数が、100点満点で60点を超えていなくても、履修申告した人の上位70%や80%といった比率に達した学生に単位を与えている可能性がある。その場合、出席状況が良いとは言えないために、試験の点数が悪い学生であっても、単位を取得することが予想される。

板倉聖宣 (2003) : 教育評価論, 仮説社.

倉田 稔 (2011) : 大学の教育と経営が音を立てて崩壊する, 札幌学院大学経済論集.

水戸康夫・進本眞文・八島雄士・権 純珍 (2013) : 「せっかち」の程度と自習時期の選択, 九州共立大学研究紀要, 第4巻第1号.

水戸康夫・進本眞文・八島雄士・権 純珍 (2014) : 喫煙習慣と単位取得との相関, 九州共立大学研究紀要, 第5巻第1号.

※本稿は、本学経済学会から九州共立大学経済学部ゲーム理論研究会への、平成26年度研究助成による研究成果である。記して感謝の意を表したい。

【参考文献】

池田新介 (2012) : 自滅する選択, 東洋経済新報社.